

レムナント様リポ蛋白コレステロールと瘀血病態との 関連について

○高屋 豊^{1,2)}、新谷 卓弘²⁾、田原 英一²⁾、森山 健三²⁾、久保 道徳²⁾、
月岡 康行³⁾、後藤 博三⁴⁾、引網 宏彰⁵⁾、寺澤 捷年⁵⁾

明舞中央病院・内科¹⁾、近畿大学・東洋医学研究所²⁾、近畿大学・医学部附属病院・薬学部³⁾、
富山医科薬科大学・和漢薬研究所・漢方診断学部門⁴⁾、
富山医科薬科大学・医学部・和漢診療学講座⁵⁾

【目的】日本人では、コレステロール値が正常でありながら冠動脈疾患を発症することの多いことが知られている。最近、このような症例においてレムナント様リポ蛋白コレステロール(以下 RLP-C と略す)が、リスクファクターとして関与していることが判明してきた。この RLP-C が高値であると血液レオロジー上、和漢診療学的な瘀血病態と類似な状態を呈する。そこで、RLP-C と瘀血病態との関連について臨床的に検討を行った。

【対象】明舞中央病院内科外来に2001年5月から2003年5月までに受診した患者を無作為に抽出し、末梢血中の RLP-C の測定(JIMRO II キットを使用)と寺澤の瘀血スコアを評価した。対象患者は199名(男性95名、女性104名)で、平均67.1歳(19～93歳)であった。

【結果】全対象の RLP-C は平均7.2mg/dL(2.5～22.5、正常値は7.5mg/dL 以下)で、瘀血スコアは平均24.9点(2.0～78.5点)であった。

RLP-C と瘀血の相関については $r=0.58$ 、 $P<0.01$ 、 $n=199$ と有意な相関が得られ、特に女性では $r=0.61$ 、 $P<0.01$ 、 $n=104$ と更に高い相関が得られた。

瘀血スコアから非瘀血群(N群：瘀血スコア20点以下)78名、瘀血群(O群：瘀血スコア21点以上40点未満)97名、重症の瘀血群(S群：瘀血スコア40点以上)24名に分類し、これら三群間の RLP-C の差の検定を実施したところ、各群間で $P<0.01$ の有意な差が得られた。それぞれの RLP-C 値は N 群 5.39 ± 1.85 、O 群 7.53 ± 3.60 、S 群 11.37 ± 4.12 (\pm SD)mg/dL であった。

【考察】RLP-C と瘀血病態とは有意な相関があることが判明した。これにより、瘀血病態が正常コレステロール者での冠動脈疾患発症のリスクとなる可能性が示唆された。

RLP-C の正常上限値は7.5mg/dL であるが、和漢診療学的にはすでに瘀血群における平均値に相当した。逆に、非瘀血群の平均値は5.4mg/dL であるが、冠動脈疾患のリスクファクターとして RLP-C をとらえるのであれば、7.5mg/dL より更に低い値が推奨されていることが報告されている。これらを考慮すると、「未病」を重視する漢方医学の特質が示されたと考える。

一方、瘀血スコアを評価するには、一定程度以上の和漢診療学的技法を習得しないと困難である。しかし、RLP-C を測定することにより、一般医家にあっても瘀血病態や冠動脈疾患のリスクを事前に把握できることが推察された。